

5/31 – Lecture 1.

「フランスのバラ研究概説」

講師：パスカル・ハイツラー氏

フランス国立科学研究センター 研究員

バラの豊かな多様性について、科学的研究のレベルでは対象とするのが難しい植物であるが、それにも拘わらず世界中の研究者はますますバラの研究に熱心に取り組んでいる。歴史があり、よく知られているバラ園が多く造園されているフランスでは、世界一とは言えないまでも、研究が盛んにおこなわれている。フランスの研究者は又、重要な展望が開かれると考えられるバラのゲノムの完全な配列の解明に向けた国際的なプログラムを、先頭に立って進めている。

バラのゲノム研究において最先端を行く研究のひとつは、モハメド・ベンダマーネ研究室にあり、RDP（植物の再生産及び発達）研究所から「花の形態形成部門」として分類表示されている。この研究室はCNRS（フランス国立科学研究センター）の支援を受け、リヨンのENS（国立高等師範学校）に属している。研究室は花の組織の分化と生長に焦点を当てているが、同時に動物と植物の両方に見られる生長の原理についても研究している。

アンジェ・キャンパスは園芸科学に貢献する大きな中心となっている。そのキャンパスの多くの研究者、例えばローレント・クレスペルはバラの生長、植物組織および蕾の生理学について研究している。ファブリス・フーシェはアンジェのINRA（国立農業研究所）で園芸と種子の研究所の舵を取っている。彼のチームは開花調整を研究しており、バラの繰り返し咲き遺伝子について興味深い発見をした。

バラの香りは、サンテティエンヌ大学のシルヴィー・バウディーノの研究テーマである。彼女はBVPam（植物応用バイオテクノロジー香料医薬研究室）を率いている。彼女のチームはバラのさまざまな香り化合物の起源について、組織と生合成経路の両方から研究を進めている。

マヌエル・ル・ブリはマルセイユにあるCNRS（フランス国立科学研究センター）のIMBE（海と陸の生物多様性及び生態学に関する地中海研究所）でチームを率いている。彼のチームは倍数体化の仕組みを研究している。特殊な環境と発達の条件下で減数分裂しない配偶子ができることが、進化の過程での多様化と、気候変動の結果として生じる可能性の有る現象を理解する基礎となりうる。

(参考事項)

1、ENS リヨン（エコール・ノルマル・シュペリウール・ドゥ・リヨン）はリヨン南部のジェラン地区に位置し、フランスの科学分野に於ける最高峰の高等教育機関（グランゼコール）の一つであって、大学やグランゼコールの教員・研究者を養成している。

ENS リヨンには 10 の研究実験室が有り、CNRS（国立科学研究センター）の協力的な支援を受けながら、他の公的及び民間研究機関と密接な連携を保って活動している。

2、倍数体

2 組以上の染色体を持つ個体のこと。

通常、染色体は母親由来の 1 組と父親由来の 1 組とがセットになっている。（2 倍体）まれに受精や分裂時の異常により染色体のセットが 1 組だけの個体（半数体）や 3 組（3 倍体）4 組（4 倍体）になった個体が生じる場合がある。